

富山・任海宮田遺跡

とうみみやた

所在地 富山市任海

調査期間 二〇〇二年（平14）五月～八月

発掘機関 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

調査担当者 武田健次郎・植木久美子

遺跡の種類 集落跡

遺跡の年代 中世～近世

遺跡及び木簡出土遺構の概要

任海宮田遺跡は県営公害防除特別土地改良事業に伴い、二〇〇〇〇〇年より発掘調査を行なつてある。遺跡は神通川及び常願寺川によつて形成された複合扇状地上に位置し、標高三〇m前後を測る。かつての流路に沿つて谷と微高地がいくつも確認でき、それらの微高地に集落が占地している。



（八尾）

任海宮田遺跡
（八尾）

（八尾）
（武田健次郎）

一世紀後半まで衰退する。しかし一二世紀以降再び活発になり近世まで存続する。木札の出土したC3地区は遺跡の北西に位置する、中・近世の集落である。木札はSD100の岸際の攪乱から出土した。SD100は南北に流れる幅約10mの規模の大きな谷で、東西両岸には集落が広がることから、集落内を南北に貫流していたと思われる。出土遺物には中世土師器・珠洲・青磁・越中瀬戸があり、一二世紀頃から近世まで存続したようである。

8 木簡の釈文・内容

（1）
・（符籙）□廿

（86）×35×4 081

上下両端を欠損、表面は削りのち墨書きされ、上半に四つの区画に一から四の数字を配し、「□廿」の呪句がみられ、呪符と考えられる。裏面は判読困難で、三文字ないし四文字みられ、右側は未加工で、墨書き部分のみ削られていて。

9 関係文献

（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『埋蔵文化財調査概要－平成一四年度－』（二〇〇二年）

